

高度経済成長期の山村における消費

—経済活動のコンテキスト分析—

辻本 侑生 *

TSUJIMOTO Yuki

Household Consumption in a Fukui Prefecture Mountain Village during the Period of Rapid Economic Growth A Context Analysis of Economic Activities

This paper investigates the production activities and household consumption patterns of a single household during Japan's postwar period of rapid economic growth. In order to delineate their modes of livelihood and consumption, I analyzed a diary that includes income and expense data during the year 1963. It was written by the husband and wife of a household (A) involved in shifting cultivation in a Fukui prefecture village.

As a result, three key points were determined: First, the division of family labor was specialized in order to earn cash income. Second, their pattern of consumption relates to the macro-scale political economy as seen in examples of shopping that depended on unemployment insurance payment cycles, choices of services and entertainment, and the way to spend time on New Year's Eve. Third, consumption practices were embedded in local social relationships, especially family, as seen in the examples of the consumption of both ritual foods and novel foods as well as trips made to shop in larger urban center.

These results suggest that studies of "economy" within folklore ought to pay more attention to modes of consumption. By doing so, researchers can focus on individual or family consumption as it relates to micro-scale social relationships and macro-scale political economy.

キーワード：経済研究 消費 山村 高度経済成長期 コンテキスト分析

* 筑波大学人文・文化学群人文学類

1. はじめに

(1) 課題

本論文は、消費を主題とした事例研究を行うことで、民俗学の経済研究へ寄与することを目指すものである。まず本節では、生業研究の研究史を批判的に検討することを通して、「経済研究」⁽¹⁾ という枠組みから消費に着目することの意義を示し、本論文の課題を導きたい。

生業研究における大きなエポックとしては1990年代前半以降展開した、安室知の複合生業論が挙げられる。安室は、個々の生業技術史や生業に基づく民俗文化類型論に終始した既往の生業研究を批判し、「生計は各種生業の選択的複合に成り立つ」という前提のもとで「その複合の様相を明らかにしてゆくこと」をめざした複合生業論を提起した〔安室2012: 12〕。

しかし、複合生業論における「生業」概念が「生計を維持するために行われる生産活動」〔小島2001: 31〕である限り、生産活動によってもたらされる生産物や現金収入は「日々の生計を維持」するのみにとどまる。中野泰も「「生業」概念が、生計維持なのか、生産対象を生産する作業全体なのか、あるいは、個別の技術を指すのかが明瞭でない」とし、「複合生業論の理念に戻って生業概念を拡大し、人を中心とする「生」を捉える必要」を指摘した〔中野2010: 63-64〕。中野の指摘を敷衍すれば、人を中心とする「生」には、「生計を維持するために行われる生産活動」のみならず、生産活動によって得た現金収入やモノを消費する活動も含まれるべきであろう。

以上に整理したように、複合生業研究は実質的には生産活動や労働のみに焦点を当てており、「生産と消費とを時間軸の前後に分断」〔門田2010: 208〕しているという問題が認められる。つまり複合生業研究には「生業」概念を刷新して、消費について積極的に議論する必要がある。こうした問題意識に際しては、近年の民俗学における経済研究の成果が注目される。茶業家を事例に農家の流通への才覚の発生を論じた渡部圭一の論考〔渡部2007〕や、小売業者を事例に流通そのものについて論じた塚原伸治の論考〔塚原2010〕、巡礼ツーリズムを事例に宗教経験の消費について論じた門田岳久の著書〔門田2013〕などが挙げられるが、これらの研究の特徴は、人々の日常から流通や消費の実践を切り離すことなくミクロな視点で記述し、さらにその日常実践をマクロな社会経済的背景へ文脈化するところにある。

門田によれば、民俗学における消費とは、「単に店先で物品を購入する場面のみを焦点化するための概念ではなく、日常実践を根底から規定する思考の様式を問うための概念」〔門田2010: 207〕である。本論文もこの定義に基本的に賛同するが、これまでの生業研究においては「単に店先で物品を購入する」、即ち買い物についてもほとんど蓄積がなく、経済研究においてはこれからの課題であると言わざるを得ない。岩本通弥が指摘した通り、民俗学は「古くから変わらずに続いていると思われる」「民俗」〔岩本1998: 28〕のみを対象としてきたきらいがあり、買い物は「民俗」とみなされてこなかったのである。先に概観した近年の民俗学の経済研究は、研究対象を「古くから変わらずに続いていると思われる」ことに限定せずに新たな視野を開いてきた面があり、なおさら買い物のような日常的な消費活動は直視すべき課題であると言えよう。

以上を踏まえ本論文は、消費を「経済活動として具体的に財やサービスを入手し、使用すること」〔原山2013: 2〕と捉え、日常的な経済活動（生産・消費）を対象とした事例研究を行う。本論文の特徴は消費へ着目するところにあるが、前述したとおり生産・消費は分断されるべきでは

ないため、生産・消費両方の事例を提示し分析を行う。

(2) 方法

前節で提示した課題に即し、本論文が扱う時代・方法・フィールドについて説明する。

時代に関して、本論文は高度経済成長期を対象とする。門田は「民俗学の消費研究では庶民の経済活動がどのような変遷を辿って今の消費社会に至っているのか」という問題意識の下で、歴史と現在とを結びつける必要を指摘した〔門田 2010: 209〕。もちろん古代から近代に至るまでの日本においても市場経済システムは存在していたが、大衆が消費に巻き込まれていく画期として、高度経済成長期は検討する必要がある。また、渡部圭一は「商い・商品・金銭の問題が前景化するはずの、いわゆる高度経済成長期の生業をめぐる事例研究」が乏しいことを指摘しており〔渡部 2007: 103〕、高度経済成長期の経済研究は研究課題として意義があると考えられる。

日常的な経済活動を捉える方法として、本論文では日記・家計簿分析を採用し、日記の解釈には聞き書きのデータも用いる。この方法は生活が急激に変化した高度経済成長期を対象とする際、単一の時空間に絞って生活を詳細に復元できる点で有効である⁽²⁾。生業研究における文字資料や数値データを用いた定量的手法に関しては、近年、山下裕作と今里悟之との間に論争がみられ〔cf. 今里 2010〕、生業ないし経済活動の実態に近づくためには、単に文字資料に記された数値データをテキストとしてそのまま分析するだけでは不十分であることが重要な論点となった。

この論点に関しては、口承文芸研究のレビューの中でテキスト分析の限界を指摘し、コンテキスト分析への展開を主張した渡部圭一の議論が示唆に富む〔渡部 2013〕。コンテキスト分析とは、口頭伝承や民俗芸能の語りや上演の「場」を焦点化し、「場」におけるミクロなパフォーマンスやコミュニケーションと、その「場」が立ち現れるマクロな社会的文脈の双方を対象化する視点であるが、農山漁村の伝統的な社会集団への適用も展望されている〔渡部 2013: 134-135〕。本論文では文字資料を用いた経済研究にコンテキスト分析の視点を持ち込み、文字資料に記された経済活動を暦通りに予定された実践の表出として捉えるのではなく、特定の「場」における実践と捉えた上で、その実践の主体と社会的意味へと踏み込む。生産であれば「誰がどの作業を担ったか」即ち家族内分業のあり方を問い、消費であれば「何をいくらで買ったか」ととどまらず、「誰が、何の（誰の）ために買ったか」をも問う視点である。コンテキスト分析の視点を経済研究に適用することで、文字資料のテキスト分析の限界を超え、ミクロな生産・消費の「場」でそのつど現出していた実践を、マクロな社会経済的背景を含めて捉えることが可能となる。

フィールドは福井県の山村である福井市味見河内地区を選定し、資料はそこに暮らすA家に残された1963年の日記を取り上げる。山村は市場経済との結びつきが強く〔湯川 2011〕、経済の問題を中心的に扱いたい本論文のフィールドに適しているからである。また、1963年という特定の年次を選んだ理由には資料的制約も含まれるが、建設需要の増加で好景気もたらされたいわゆる「五輪景気」の最中の年であり、消費に着目する上でも興味深い1年である。

本論文は全6章からなり、第2章で調査地と資料の概要、第3章で家計収支と生産の家族内分業の事例、第4章では消費の事例を提示する。第5章で事例を分析し、結論へと至る。なお、個人情報保護の観点から、日記中の苗字・屋号はアルファベットの大文字、個人名は小文字に置き換えた。

2. 対象

まず、調査地の概況を述べる。A家が暮らす福井市味見河内地区は福井市中心部の東南30kmの地にある山間地区であり、集落中心部の標高は約240mである。藩政期は大野藩に属し、明治期以降も大野郡の一部であったため、福井市街より大野市街との関係が強かった。1889年に大野郡上味見村に所属し、1955年には足羽郡美山町、2006年には美山町の合併に伴い福井市に所属した。戸数は明治期には80戸台であったが、昭和30年代には60戸台、現在は20戸台となった。宗教はほぼ全戸が聖徳寺（浄土真宗高田派）の檀家である。

近代期の味見河内地区は米作を主たる生産活動としつつも、河川源流部に位置するため水田面積は少なく、戦前期は常畑での主穀と商品作物（桑・楮など）の栽培と養蚕が盛んに行われ、酒蔵で精米等に従事する出稼ぎも行われた。昭和初期ごろから養蚕が衰退し、代わって炭焼きが隆盛した。また、後述するように夏焼きの焼畑により、赤カブの栽培も行われた⁽³⁾。

次に、資料とするA家日記の様式と記載について検討する。A家は1963年当時、水田1反4畝、畑4畝、山林5反を所有し⁽⁴⁾、家族構成員は夫43歳（1920年生まれ）、妻36歳（1927年生まれ）、母（姑）66歳（1897年生まれ）、長男14歳（1949年生まれ）、長女11歳（1952年生まれ）、次男8歳（1955年生まれ）の3世代6人家族であった。日記の書き手は夫と妻で、3月中旬～10月下旬は夫が書き、夫が出稼ぎ期間中（10月中旬～3月中旬）は妻に交代した。

図2は、A家日記の様式を示したものである。日記は雑誌「家の光」付録の家計簿に記されているが⁽⁵⁾、その様式は「家の光」が意図した使用方法には全く従っていない。用意されているフォーマットでは、見開き1ページで6日分の金銭の出納を、細目ごとに逐一記録することができるようになっている。しかしA家日記はこの使用方法と真逆であり、金銭出納欄にその日の出来事が数行記され、金銭出納欄の下部に設けられた日記欄に、その日の出費と細目が記されている。

A家日記の家計簿としての役割に注目すると、各月の最後のページにはその月の支出の集計が、さらに日記の末尾には年間の収入と支出の集計が、全て夫の筆跡でなされている。長男と長女への聞き取りによれば、夫は真面目で几帳面な性格で、「寝とっても、（書き漏らした内容を思い出して）起き出して書いてた。何もかも自分一人が任されてるって感じ」であったという。日々の出来事を細かく記録し、不在期間は妻に記録を任し、日記の記録を読み返して収支の集計を行う行為は、世帯主としての夫の責任感に依っていたと言えよう。

具体的な記述の内容に注目してみよう。典型的な記述の例として9月5日の夫の記述をあげる。

[事例1] 一人山へ。午前中だけ木を割り、昼食に家へ帰り、はさばを作る。前のHの田に。妻は午前中くわ谷でかぶらすぐりをして、後は、はさば作り。夕方六時半に終る。夕食後Dで寺の集会。寄付金千円。国保から体温計をもらう（9月5日（木曜）・夫）

1日の出来事が時系列で記され、行った仕事や起きた出来事は「朝食前」「午前」「午後」「夕食後」などとだまかに区切られている。事例1のように淡々とした記述が多いが、母と夏休み中の3人の子供が敦賀へ4泊5日で海水浴に出かけているときは、夫が「帰てもだれもおらずさみしい」と記したり、最後の炭出しが終わった10月30日に妻が「今日は少しごはんがおいしい」と記し

収入の核となった3つの生産活動について、それぞれ概略を説明しておきたい。まず炭焼きは、6月下旬から10月中旬まで行われ、生木を窯に入れて点火してから取り出すまで約1週間のサイクルを繰り返し、主に黒炭を生産した。材木はナラ・ブナ・サルスベリ等が利用され、材木利用権は土地の所有権とは別であるため、私有林を借りるか入札で共有林を借りた。炭窯（土窯）を設ける作業は重労働であるため数年間同じものを使い、窯の近くの材木を使いつくしてしまった場合はその近くの山の利用権を買い、そこから窯まで木を切って担いでくる作業（「木寄せ」）が必要となった。完成した炭は「鉄さく」とよばれるワイヤーを用いた道具で林道に下して俵に詰め、農協を通して主に福井市内へ出荷された。

出稼ぎは10月下旬から翌年の3月中旬まで行われ、味見河内地区では金沢や京阪地方の酒蔵で精米作業に従事する者が多かった。A家の夫は金沢に本社がある酒蔵に出稼ぎをしていたが、1958年に伏見支店が新設された後は伏見に出稼ぎ先を変更し、さらに味見河内地区周辺から同社の伏見支店へ出稼ぎに出る者たちの「親方」として人員募集のとりまとめ等も行った。

焼畑は8月に火入れを行い、初年度は赤カブを播く。赤カブは10月中旬～12月にかけて収穫され、大野市街の七間町で開かれる朝市において販売された。大野市街では真っ赤なカブの漬物が正月の縁起物として重宝されており、自動車やバスがなかった時代は、女性たちが朝3時に10貫程度（約40kg）の赤カブを背負って出発し、徒歩で約13kmの峠道を越えて大野市内の朝市に出荷していた。1963年にはA家は自家用車を所有しておらず、自家用車を持つ村人に乗せてもらったり、バスを利用したりすることもあれば、徒歩で出荷することもあった。

次に支出について検討する（表2）。支出の合計は477,030円であり、収入の約76%にあたる。まず、炭焼きにかかる費用が57,055円（約12%）と最多であり、前述した「鉄さく」のワイヤーに23,000円を筆頭として、炭切機や出荷用俵の購入にあてられていた。さらに米（6俵半）の購入に36,500円（8%）、娯楽費に27,727円（約5.8%）、教育費に25,264円（約5.2%）、贈答や宗教行事における交際費に17,418円（約3.6%）、子供3人の小遣いに12,420円（約2.6%）があてられていた。なお、第4章で取り上げる福井市街での夫の買い物と大野市街における妻の買い物は合計54,649円であり、支出の約11.4%にあたる。町場における消費は、炭焼きへの設備投資に次いで大きな支出であったと言える。

支出の中には真宗関係の行事やローカルな社会関係に基づくものも多くみられる。例えば「交際費」の中には毎月16日に行われた講行事のお布施が含まれ、支出欄に「御講様」という項目で毎回100円程度の支出として出現する。興味深いものとしては表2の「耕運機」があり、6月9日に耕耘機を他世帯からレンタルした際のものである。この日の支出欄には「M3時間半 2975」「K4時10 3330」「Y30分 425」という記述がみられ、M家とY家からは1時間850円、K家からは1時間800円のレンタル料で耕耘機を借りていたことがわかる。なおK家からのレンタル料がM家とY家に比べて若干安いのは、K家が妻の実家だからであると推察される。

（2）家族内分業

表3は日記中の各作業の登場回数をカウントし、夫と妻の労働投下量を近似的に示したものである。これに基づき、まず夫の作業の特徴を述べる。10月中旬～3月中旬までは京都市伏見区の酒屋に出稼ぎし、精米に従事した。3月中旬～5月は、稲作、畑作、植林など複数種の作業を行った。3月は比較的多く休みや遊び（他世帯との「お茶のみ」、3月末の京都・奈良への家族旅行）がみられた。4月は他家の屋根ふきや家の新築への手伝いがみられた。6月上旬～10月中旬

表1 A家の収入(単位:円)

項目	金額
炭焼き	363,700
冬過(出稼ぎ)	82,700
赤カブ出荷	63,200
失業保険(夫)	48,700
失業保険(妻)	43,200
フキ売り	5,500
田取られ※	4,300
炭切機補助金	4,100
屋根ふき	3,000
植林補助金	2,300
その他収入	5,700
合計	628,300

※A家所有の水田の一部が、林道拡張に伴って埋められたことへの補償金

表2 A家の支出(単位:円)

項目	金額	項目	金額
木炭関係費	57,055	油屋払	9,000
米(6俵半)	36,500	耕運機	6,370
失保買物	34,738	葉屋	6,200
娯楽	27,727	肥料	5,890
V払2回※	27,500	母に渡す	5,800
教育	25,264	X払	5,800
切符・盛割※※	24,587	年貢	4,300
かぶら売買物	24,211	妻病院	4,265
W払2回	23,888	テレビ受信料	3,960
山	21,140	手間代	3,000
交際	17,418	Z払	2,160
子供小使	12,420	その他	88,218
組合払	11,868	合計※※※	477,000

※村の近くの商店へのツケ払い

※※税金や保険金、光熱費等を意味する

※※※日記に記された数値を示しており、実際の計算と異なる

まで、村の共同作業や焼畑作業、8月28日の炭焼き組合の遠足を除き、毎日炭焼きの作業を行った。焼畑の伐採(野刈り)、火入れ(野焼き)は、7~8月に炭焼き作業の間を縫って行った。

次に妻の作業の特徴に注目する。1963年はいわゆる38豪雪の年であったため、1~3月は「雪なぶり」「雪おろし」など雪かき作業が多かった。一方で、冬季のため農作業や山仕事はみられず、針仕事などの室内作業や、近所との「お茶のみ」なども多く、2月は縄ないや藁仕事が目立つ。5~10月は夫と共同で炭焼き作業を行うことが多いが、後述する通り、妻単独で農作業を担うこともあった。11月中旬~12月下旬は、赤カブの収穫、出荷準備、大野朝市での販売に従事し、合間を縫って畑仕事や、かやかき、山いも掘りを行った。

表3からわかるように夫婦ともに群を抜いて炭焼きへの労働投下が多く、現金収入の58%を占める炭焼きに多大な労力を費やしていた様子が理解できる。ただし、日記における炭焼き作業の登場回数は夫より妻の方が20回ほど少なく、その20回分は妻による畑への施肥や水田の草取り、稲刈り、さらには7月19日のように父兄会の出席に回されていた。自給的な畑作業や、父兄会への出席といった現金にならない仕事は妻が分担し、夫は現金になる仕事に専念していたのである。

現金収入への特化を支えるものとして、母(姑)の動きも注目される。母は稲刈り、豆もぎなどの農作業を時折担うのみであり、日記に記された労働は片付けなど雑多なものが多い。しかし、長女への聞き取りによれば「家の事は全部ばあさん(姑)がやった」といい、妻は夫とともに炭焼きなどの仕事に専念し、炊事・洗濯は姑が担っていた。日記に記されない家事労働は、母が分担していたのである。

さらに、母は宗教行事への参加も一部担っていた。炭焼き繁忙期である、8月25日の記述をみてみよう。

[事例2] 第五回目の炭出し日。日曜でt(長男:筆者註)も来て三人で五八俵作って帰る。Cで上村の総報恩講、母が一人まいる。夕食後tの散髪をする(8月25日(日曜)・夫)

表3 夫と妻の分業

夫	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	
	仕事														
田仕事	酒造出稼ぎ ～3月中旬			0	3	7	1	0	0	2	2			15	
畑仕事				0	2	2	0	0	0	0	0			4	
炭焼き				0	0	9	21	26	28	30	19			133	
焼畑作業				0	0	0	0	2	4	0	0			6	
林業				0	2	7	2	1	3	0	0			15	
フキ等採取				0	0	1	0	0	0	0	0			1	
雪かき				1	0	0	0	0	0	0	0			1	
共同作業				0	7	1	3	1	0	0	0			12	
失業保険受給				1	5	4	4	1	0	0	0			15	
お茶のみ・遊び				8	0	0	0	0	1	0	0			9	
妻		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
仕事															
田仕事	0	0	0	2	6	2	1	1	6	1	0	0	0	19	
畑仕事	0	0	1	6	1	2	5	4	1	1	4	0	0	25	
炭焼き	0	0	0	0	5	17	20	21	19	25	5	0	0	112	
焼畑・赤カブ売り	0	0	0	0	0	0	2	5	3	0	19	20	0	49	
林業	0	0	0	2	4	0	3	2	0	0	0	0	0	11	
フキ等採取	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	5	
山芋掘り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	0	7	
雪かき	9	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	22	
かやかき	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	5	
藁仕事・縄ない	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	
針仕事・ミシン	3	1	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	
共同作業	0	2	0	0	4	1	0	1	2	0	0	0	0	10	
失業保険受給	2	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	
お茶のみ・遊び	4	4	6	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	17	
父兄会・学校行事	1	1	1	0	0	1	1	0	1	2	0	3	0	11	

注) 数字は日記への登場回数を示す。主要な分担がみられた仕事には、灰色の網掛けを付した

事例2からは、所属自治会の総報恩講という重要な行事がある一方で、完成した炭を窯から出す極めて重要な作業を行わなければいけないという状況が読み取れる。こうした状況において、夫婦は夏休みで学校が休みの長男をも炭出し作業に加えたうえで、宗教行事への参加は母に担わせていたのである。同様に10月4日にも夫婦が炭焼き作業を行い、母が村人の葬式に出席した。

4. A家の消費活動

(1) 食

まず消費の一例として、食に着目する。A家は炊事をほとんど母に分担させる家族内分業であったため、夫と妻が記していた日記に日々の食事の献立はあまり出現しない。表4は日記中に出現した献立の記述の全てを一覧にしたものであり、やはりその記載数は多くはないが、むしろ記された献立がそれぞれ特別な意味を持っていたことが推察される。

はじめに「餅」「ぼた餅」「おはぎ」「赤飯」「おすし」といった儀礼的な献立に注目する。例えば9月13日には「赤飯の食事」という記述があるが、この日は味見河内地区の氏神である住吉神社の秋祭りである。また、12月9日には「山まつりで町はおやすみ。おひるは餅つき」という記述がある。「山まつり」は年中行事の1つであり、聞き取りによれば、この日は山に入ってはならず、山仕事に用いる道具をきれいに洗ってから餅や団子、煮しめを供えたという。

しかしながら、日記中に儀礼食が出現する事例は、むしろ年中行事や儀礼で説明がつかない日

表4 日記中の献立に関する記述一覧

月日	曜日	書き手	記述(一部を抜粋している)
1月5日	土	妻	オムライスをするのでiさん(村内の友人:筆者註)をよんでやる
1月7日	月	妻	t(長男:筆者註)のためにぜんざいをして食べる。十時半ごろご飯と食べ十一時にtは出ていく
1月14日	月祝	妻	夜はお寺にまいる。ぜんざいがとてもおいしかった
1月15日	火	妻	t(長男:筆者註)に夕食のおすしを作ってやる。十一時半ご飯を食べtは出かけたが今まで天気だった空が急に暗くなりものすごい吹雪になる。目もあけていられないくらいだ。でも何もかぶらずにみんなと一緒に出ていく。かわいそうに
1月18日	金	妻	Dから鳥を一羽わけてもらったので料理をDに行って教わり作る
1月23日	水	妻	婦人会の役員だけUさん(村一番の有力者:筆者註)へおよばれに行く。かしのすきやきでとてもおいしい。トランプをしたりぜんざいを食べたりして五時ごろまで遊ぶ
1月31日	木	妻	夕食はちawanむしをした
2月2日	土	妻	天気が良いので又雪はこびをする。今は午後からN(村内の親戚:筆者註)の子らが三人来てくれたので、とてもたすかった。夕食はすきやきをごちそうしてやる
2月3日	日	妻	雪はやまないが、子供達はまじめに仕事をする。八人が一日中したのでどうやらうしろの屋根が出た。夕食はみんなでカレーライスを食べた
2月20日	水	妻	昼過ぎ餅をつく。明日のお弁当に
2月26日	火	妻	お茶のみだったが私はH(村内の親戚:筆者註)は行く。今日はなわのいをやめて針仕事をした。EやFも来てにぎやかな一日。やきまんじゅうを作って食べた。草餅を作る
3月2日	土	妻	私は針仕事。夕方t(長男:筆者註)が帰って来た。y(次男:筆者註)やm(長女:筆者註)は大喜び。夕食はオムライスを作る
3月9日	土	妻	夕方t(長男:筆者註)が帰ってきたので夕食はうどんを作る
3月10日	日	妻	t(長男:筆者註)のごちそうに朝おはぎを作る
5月5日	日	夫	子供全分とで赤畠で杉葉かつぎ。春祭りで昼食に帰る。nが遊びに来ているので昼寝も出来ず三時にお宮へ詣る。すこし早く帰り杉おこしの縄をゆい夕食に。ちらしずしを喰て、分校へ映画に行き帰りは十二時半
5月17日	金	夫	妻は明日t(長男:筆者註)の遠足なので、すし作り
5月21日	火	夫	H(村内の親戚:筆者註)からぼた餅をもらう
6月1日	土	夫	田休みだったが山へ二人で。妻は六時に、私は七時に帰る。Fから鳥を一羽もらって焼鳥する。ビールものむ
6月3日	月	夫	城町(福井市街の地名:筆者註)へ昨日とってきたフキをもっていき、ライスカレーをごちそうになる
6月17日	月	夫	母の誕生日で鯛を買ってきた。米糠をYで玉子と交換してもらう
8月4日	日	夫	夕食にヒヤコーとビール小びん
8月6日	火	夫	すいかを食た
9月13日	金	夫	朝早く朝食をもって二人で山へ木切り。午後に帰り(中略)お宮へまいる。y(次男:筆者註)は角力を取り二十円。赤飯の食事。分校で映画
9月20日	金	夫	夕食にはサンマで八つ百円
11月2日	土	妻	夕食はぼた餅がしてあった。とてもおいしい
11月9日	土	妻	夕食はおはぎでとてもおいしい
11月26日	火	妻	夕食はカレーでとてもおいしい
12月9日	月	妻	山まつりで町はおやすみ。おひるは餅つき
12月17日	火	妻	朝から小学校へ研修会に行く。昼食は学校で子供達が食べる給食があたった。パン、ミルク、カレーなどがありとてもおいしかった
12月25日	水	妻	t(長男:筆者註)はQへクリスマスパーティーに行く。家ではみんなケーキを食べる
12月30日	月	妻	Lからたくさんそばをもらってとてもおいしかった

が多い。典型的な儀礼食である「ぼたもち」「おはぎ」の例をみてみよう。1963年当時中学3年生であった長男は、積雪で通学不可能となる冬季のみ中学校で寄宿舎生活をし、週末に帰宅していた。長男が帰宅したとき、妻が「すし」や「うどん」と並んで作っていたのが「ぼた餅」「おはぎ」であり、例えば3月10日には「t(長男)のごちそうにおはぎ」という記述がある。また5月21日には村内の親戚H家から「ぼた餅をもら」っているが、これは翌日妻がH家の田植を手伝いに行ったことと関連していると推察される。さらに、11月2日の夕食は「ぼた餅」であり、11月9日の夕食にも「おはぎ」が登場する。1週間に2回も「ぼた餅」「おはぎ」が登場する理由は判然としないが、伝統的な年中行事や儀礼との関係は認められない。

次に、高度経済成長期に消費が伸びた新しい食材、献立、嗜好品に注目する。まず食材の例と

して鶏肉に注目すると、鶏肉が日記に登場するのは年にわずか4回だけである。そのうち2回は6月1日の「田休み」（一般にいうサナブリ）、12月9日の「山まつり」という村レベルの年中行事であり、田休みで食べた鶏肉は村内有力家から「もらって」焼き鳥にし、かつビールも一緒に飲んでいる。1回は1月23日に妻を含む婦人会の役員が村一番の土地持ちの家に「およばれ」し、「かしわのすきやき」をごちそうになった時である。残りの1回、2月2日は、雪下ろしを手伝ってくれた親戚の子供たちへのお礼を込めて、すきやきを「ごちそう」している。

献立の例として、カレーライスに注目する。11月26日のように妻がカレーライスを食べる時は出稼ぎに行った夫を除く家族と一緒に、2月3日のように雪かきを手伝ってくれた親戚の子供たちが加わることもあった。また、12月17日のように学校での研修会に参加し、給食のカレーライスを食べたこともあった。一方、夫の記述に「ライスカレー」が出てくるのは1回だけで、それは失業保険受給のため6月3日に1人で福井市街へ行き、そのついでに知人に「ごちそうにな」った時である。

最後に嗜好品の例として、ビールに注目する。ビールは6月1日と8月4日の2回のみ出現し、6月1日は「田休み」である。8月4日は年中行事との関係は認められないが、前後数日の記述からは8月2日から6日まで母と子供3人が敦賀へ旅行していることが読み取れ、家に夫婦2人しか残らない中、炭焼きの作業が終わった後に酒を嗜んだ様子が推察される。

(2) 町場での買い物

次に、町場での買い物の事例を提示する。まず、夫の買い物行動に注目する。

[事例3] 南風が強い。学校のスクリュ（スクールバスのことか：筆者註）で一番のバスで失保に。調子よく十一時前に現金をくれる。自動車学校に見学に行ってくる。雨となる。色々の買物をして三時十分のバスで帰り、雨分倉庫の精米をやる。福井で買って来た魚さばを三尾Jへもって行く（4月23日（火曜）・夫）

事例3の「失保」とは失業保険のことである。夫は半年間出稼ぎをしていたため、1947年から施行された失業保険法にのっとり、3ヶ月間は福井市街にある職業安定所で失業保険金を受給することができた⁽⁶⁾。表5からは、夫が3月下旬から7月上旬まで、失業保険金受給のため毎週ほぼ同じ曜日に福井市街へと1人で出かけ、現金を受け取るとそのまま買い物を行っていたことがわかる。そこでは衣服や雑貨の比重が高く、食品は塩鱈のような高級品、ラーメンやバナナ、魚肉ソーセージのような目新しいものを購入していた。さらには、昼食（「弁当」）にお金を使う頻度は高く、外食を好んでいた様子もうかがえる。家族のためにお金を使う様子もみられ、子供たちの服の他、6月17日は妻の靴と「母の誕生日」のための鯛（表4）を購入している。

一方、大野市街で買い物を行っていたのは、妻である。妻の買い物の事例をみてみよう。

[事例4] 私とm（長女：筆者註）は朝四時におきて町へ、t（長男：筆者註）とy（次男：筆者註）は二番のバスで行く。今日はとてもたくさん行ったので中々売れなかったが高く売れる。山いもが八百メで950円。子供達のほしい物が半分も買えないが、たくさんお金はつかった。帰りは歩いて、tはIとバスで帰る。ひどいしもがふっていた（11月17日（日曜）・妻）

事例4の「町」は大野市街のことである。妻は10月中旬から12月下旬まで、焼畑で栽培した赤カブを山を越えた先の町場である大野の朝市で売り、ついでに買い物をしてきた。表5によれば、妻の買い物は夫に比べると食品の割合が高く、うどん、リンゴ、菓子など同じものを購入する傾向があった。外食は25回中1回に限られ、その1回は休日に子供たちと一緒に赤カブ売り

表5 夫と妻の町場での買い物(単位:円)

	月日	曜日	食品	衣服	雑貨	昼食	バス代	小遣い	その他	不明	合計	備考	
福井市街での夫の買い物	3月30日	土			340	160	310				810	「雑貨」のうち240円は百貨店(だるま屋)で購入したヤカンとネクタイ	
	4月2日	火	17	420	198		320				955	「雑貨」のうち130円は長男のメガネ、「衣服」420円は次男のシャツ	
	4月9日	火	250	680	1,095		140				2,165	「衣服」680円は次男のバジヤマ	
	4月16日	火	375	780	855	60	230				2,300	「衣服」のうち480円は長男のジーパン、「雑貨」のうち95円は天ぷら鍋	
	4月23日	火	460		525		325			3,000	4,310	「食品」は魚(サバ、コナゴ、シジミ)、土産、パン、焼きまんじゅう	
	4月30日	火	210	1,140		55	280			750	2,435	「食品」のうち128円は塩鱈	
	5月6日	月	493	165	335	60	310			510	1,873	「食品」は小魚、鮓、ソーセージ	
	5月13日	月	895		10	30	310				1,245	「食品」は塩鱈、海苔、カンピョウ、高野豆腐、ガム、パン、氷砂糖	
	5月20日	月	230		880		270				1,380	「雑貨」のうち480円は夫の靴	
	5月27日	月	391	300		60	320				1,071	「衣服」300円は山仕事用のズボン	
	6月3日	月	231		300		300				80	911	「食品」のうち60円はラーメン、「雑貨」のうち80円はハンカチ3枚
	6月10日	月	260		380	85	310				60	1,095	「食品」は海苔、佃煮、パン、ソーセージ、バナナ
	6月17日	月			650		不明				140	790	「雑貨」650円は妻の靴
	6月24日	月	190	380	600	270	450				30	1,920	福井市街で長男と合流したため、バス代と昼食代は2人分
	7月1日	月	150	360	1,550	95	280		400	95	2,930	「その他」は医療費(骨接ぎ)	
	合計		4,152	4,225	7,718	875	4,155		400	4,665	26,190		
	平均		319	528	594	97	297		400	583	1,746		
大野市街での妻の買い物	11月12日	火	315				135				450	「食品」はリンゴ、コーヒー、おかず、パン、魚	
	11月13日	水	257	300	110		135				802	「食品」はリンゴ、コーヒー、さつまあげ。「衣服」は長女の靴下	
	11月17日	日	455		300			1,165		200	2,120	「食品」はパン、菓子、うどん、魚。「不明」はきれくず	
	11月19日	火	330		460		150		280		1,220	「その他」は傘修理	
	11月21日	木	60	640						60	760	「衣服」は山着	
	11月23日	土						1,864	510		2,374	「小遣い」は長男1000円、長女200円、次男200円	
	11月24日	日	400		400			1,600			2,400	「雑貨」は手袋(2人分)。	
	11月26日	火	393				125				518	「食品」はコーヒー、ちくわ、味噌、菓子	
	11月27日	水	333	200			125				658	「衣服」は母のエプロン	
	11月30日	木	311						150		461	「食品」はコーヒー、菓子	
	12月1日	日	730							40	770	「食品」はジャム、パン、うどん、菓子	
	12月2日	月	216	280	180				150	30	856	「食品」はコーヒー、佃煮、菓子。「衣服」は母のモンペ	
	12月4日	水	420								420	「食品」は菓子、コーヒー	
	12月5日	木	135				135		280	550	1,100	「食品」はリンゴ、コーヒー、佃煮、菓子、うどん。「その他」は募金	
	12月6日	金	230				70				85	385	「食品」は菓子
	12月8日	日				285	195	1,630		160	2,270	「昼食」285円は食堂にて(妻と子供3人)	
	12月10日	火	740				70				810	「食品」は生姜、味の素、昆布、ジャム、パン、菓子、うどん	
	12月11日	水	521						220	25	766	「食品」は魚、菓子、麩、片栗粉。「その他」220円は妻の医療費(歯医者)	
	12月13日	金	474		315					40	829	「食品」は缶詰、鮭、うどん、菓子。「雑貨」のうち200円はクリスマスプレゼント	
	12月19日	木	600		130		150			150	1,030	「食品」はケーキ、味噌、菓子、おかず	
	12月20日	金	380		10		215		500		1,105	「食品」はリンゴ、菓子。「その他」500円は医療費(歯医者)	
	12月25日	水	515		200		215		700		1,630	「食品」は昆布、リンゴ、缶詰、菓子。「その他」700円は妻のパーマ代	
	12月27日	金	985		350		210				1,545	「食品」は出汁ジャコ、片栗粉、高野豆腐、菓子	
	12月28日	土	1,085		350		185				1,620	「食品」はリンゴ、昆布、出汁ジャコ、菓子。「雑貨」は皿10枚	
	12月29日	日	925		355		140	20	120		1,560	「食品」はコンニャク、砂糖、片栗粉、佃煮、菓子。「雑貨」は手袋、タワシ	
合計		10,810	1,420	3,160	285	2,255	6,279	2,910	1,340	28,459			
平均		470	355	263	285	150	1,565	323	134	1,138			

をした後のことである。また、たびたび出現する「コーヒー」や、12月25日の「パーマ」などからは妻の個人的な消費の様子もうかがえる。

（3）サービス業・メディアの消費

ここまでの事例では消費を買い物に限定しすぎたきらいがあるため、最後にサービス業やメディアに関わる消費の事例をあげておきたい。

〔事例5〕炭焼の遠足で山中温泉に行て来る。サービスの悪い旅館であまり面白くなかった。妻は一日長畑で杉原刈り、母は保健所のレントゲンや血圧を見てもらう（8月28日（水曜）・夫）

夫が炭焼きの組合の遠足で、石川県の山中温泉に行った時の記述である。前日の8月27日の日記を見ると「早朝Sが明日温泉行を知らせて来る。仕方なくよび焚に行く」という記述があり、この遠足の告知が急であったために、炭焼きの作業工程を「仕方なく」調整し、遠足に参加したことが読み取れる。「あまり面白くなかった」という不満には、こうした背景も推察される。

〔事例6〕とても良い天気。一人で炭出へ行き炭出しをする。（中略）夜は分校で芝居があったが私は行かなかった。t(長男:筆者註)は足羽山へ遠足。母は御講様(10月23日(水曜)・妻)

〔事例7〕晴。今年さいごの日。のどかな一日。朝せんたくをしたりして午後外のそうじや家のそうじをする。子供達も手伝ってくれる。夕食後皆な風呂に入り今年のごれをながしみんなでテレビを見る。今紅白歌合戦がすんだ所。新しい足音がせまって来ます。大きなきぼうをゆめ見ておやすみ一九六三年（12月31日（火曜）・妻）

事例6には分校での「芝居」がみられる。この芝居の性格は明らかではないが、集落内に存在していた分校では、芝居の他に映画の上映も行われ、子供たちもしばしば見に行っていた。また、事例7からは、大晦日にみんなで紅白歌合戦を見て年越しをするという光景が浮かび上がる。

5. 分析

（1）生産・消費とマクロな社会経済的背景との連関

序論で述べた通り、近年の経済研究においては、人々の日常の実践をマクロな社会経済的背景に文脈化することが大きな特徴である。本論文においても、考察をそこから始めてみたい。

まず、第3章で示した生産の事例からは、A家の生産活動が現金収入の獲得に特化したものであり、家族内分業も現金獲得に適合的な形態をとっていたことが浮かび上がる。夫は、炭焼きと出稼ぎという現金獲得に関わる仕事に特化し、妻は炭焼き作業や赤カブ出荷を担って現金獲得のための主要な労働力となりつつ、畑作による自給用野菜の生産、および学校行事といった生産活動以外の仕事をも適宜分担した。母（姑）は炊事や洗濯などの家事を一手に担い、炭焼きの繁忙期には村の宗教行事への出席をも分担した。また、長男を主とした子供3人も、学校が休みの日

曜日や長期休暇中には、炭焼き作業や、焼畑作業、大野市街への赤カブ出荷に参加していた。

こうした家族内分業を1963年という時代背景に文脈づけるとき、1960年代が「産業化に対応した勤労意欲に裏付けられ、物価上昇を上回る率で収入の規模拡大が進んだ時代」〔倉敷2013:45〕であるという点は重要である。A家の収入(623,800円)は1963年における農家収入の全国平均(596,900円)と大差なく⁽⁷⁾、ナショナルな収入の規模拡大と同期していたと言えるだろう。収入の使い道に目を向けると、第4章で示した消費の事例はもちろんだが、主食となる米の不足分は現金で購入し、近隣農家からの耕耘機の借用には親戚であっても現金のやり取りが発生し、炭の運搬や出荷にも現金支出が必要であった。マクロな経済の拡大は日常生活の主食や生産活動といった領域にすら現金の比重を増大させ、その結果として、現金収入の獲得に特化した家族内分業が編成されたと言えよう。

さらに、第4章で示した消費の事例からは、消費と社会福祉制度との関係が捉えられる。例えば事例3で示した通り、夫は出稼ぎから帰ってから3ヶ月間、毎週決まった曜日に福井市街に出かけて保険金を受給し、その足で買い物を行って「ラーメン」や「バナナ」「ソーセージ」を購入していた。1963年当時自動車を所持していなかったA家にとって、失業保険を受給するというインセンティブがなければ、わざわざ30km離れた福井市街へと出かけることはなかっただろう。出稼ぎ労働者にとって失業保険が収入の増加をもたらしていたことは、瀬戸内の酒造出稼ぎを事例として松田陸彦が既に明らかにしている〔松田2010〕が、本論文の事例からは、夫の消費リズムと消費行動範囲の拡大が、失業保険という現代的な社会福祉制度と密接に関連していたことが浮かび上がる。こうした視点は現代民俗学においてもはや前提となりつつあるが〔cf. 門田2011:90〕、日常生活における買い物一つをとっても、マクロな社会経済的背景との関連は無視できない。

また、買い物に限られない消費にも着目すると、事例5で炭焼き組合の遠足で行った温泉旅館の「サービス」の悪さを記す夫や、事例6で分校での芝居に「私は行かなかった」と記す妻からは、村レベルにおけるサービスや娯楽をただ一方的に享受するのではなく、主体的に吟味し、選択しながら消費を行う姿が浮かび上がる。「消費社会」が「諸個人における選択の自由度の高さ」を含意するものであるとすれば〔原山2013:2〕、こうした事例はまさしく現代社会における選択的な消費行動の萌芽とみなすことができるだろう。

一方で、事例7では「みんな」で紅白歌合戦を見た直後、妻が「新しい足音がせまって来ます。大きなきぼうを夢見ておやすみ一九六三年」と日記に記しており、オリンピックを翌年に控えたこの時代の雰囲気を読み取れる。修辭的な表現からメディアの影響を読み取るのは類推に留まるが、新年を迎える高揚感も、それを日記に記述することも、マクロな時代背景の影響を受けた思考様式に基づいていたのである。

(2) 消費の場において重層する社会関係

前節ではマクロな文脈との関わりに重点を置いて分析を行ったため、本節ではミクロな実践について消費に焦点化して分析を進めていく。

例えば第4章の冒頭で示した儀礼食の事例について、「ハレ」の日ではないのに「おはぎ」「ぼた餅」を食べるようになったことを、単に高度経済成長の進展と共に「ハレ」と「ケ」の区別が曖昧になったと分析するのでは、前近代的な生活復原を追い求めた既存研究の枠組みと変わらない。ここで手がかりとなるのは、日記に記された献立は、毎日の記録として機械的に記されたも

のではなく、夫と妻にとって何らかの意味がある献立が選ばれて記されていたことである。即ち、なぜ年中行事や儀礼の日ではないのに「おはぎ」「ぼた餅」を食べたのか、そのコンテキストを明らかにすることが重要となるのである。「おはぎ」「ぼた餅」の事例においては、雪の中を寄宿舎から帰ってくる長男のための「ごちそう」であり、田植を手伝った親戚からの贈与でもあった。

高度経済成長期に消費が伸びた新しい食材・献立・嗜好品に着目しても、その消費が多様な性格を持つことが浮かび上がる。鶏肉は婦人会の集まりで「およばれ」し、村レベルの年中行事で「もらって」、雪かきを手伝ってくれた親戚の子供たちに「ごちそう」していた。カレーライスについては、家族から離れて福井市街の知人に「ごちそうにな」ったことを記す夫と、家族と一緒に食べて「おいしい」と日記に記す妻のように、その味わい方に個人／家庭というコントラストがみられた。ビールは2例しか出現しないが、一方は田休みという村レベルの行事において祝祭的な雰囲気消費され、他方は子供達と母（姑）が旅行で不在の際に、仕事を終えた夫婦2人で消費されていた。

村の外部での買い物についても分析してみたい。夫の福井市街における買い物では外食や目新しいものの購入が好まれるが、妻の大野市街における買い物は同じような食品の購入に傾斜しており、ここにも個人／家庭というコントラストがみられる。しかしながら、一見家族から離れて好きに買い物をしているようにみえる夫も、福井市街で妻に靴を買い、母の誕生日には鯛を買い、子供達の服を買っていた。妻も大野市街で姑の服を買い、子供達には小遣いを頻繁に与えつつも、パーマをかけるという個人的な楽しみもみられた。さらに、事例4の妻の「子ども達の欲しい物の半分も買えないが」という記述からは、家計予算という制約がある中、何とか子供にお金を使ってあげたいという妻の心情が読み取れる。

以上の分析からは、消費の実践が社会関係に埋め込まれていることがはっきりとする。例えば「ぼた餅」「おはぎ」は妻と長男の親子関係、あるいは親戚間の労働扶助において相手をねぎらうために消費され、鶏肉は村落内や親戚間において贈与を行う際に消費される食材であった。また、ビールは村落の祝祭日においても夫婦関係においても、大人だけの時空間の中で消費される嗜好品であった。町場は夫と妻にとって自分のためにお金を使う場でもあれば、家族の誰かのためにモノを買っていく場でもあり、さらに親という立場から子供たちにお金を使ってあげたい場でもあった。家族内の社会関係が目立つ点や、カレーライスの味わい方と村外での買い物に夫婦のコントラストがみえる点は、高度経済成長期における生活の「家庭」への収斂や「主婦」役割の強化という時代的文脈と関連していると言えるだろう [cf. 矢野 2007; 倉敷 2013]。

6. おわりに

本論文は民俗学の経済研究の立場から消費に注目することを目的とし、福井県の山村（福井市味見河内地区）A家の日記を資料として用いて、1世帯に焦点化した分析を行った。

本論文で示した視点は、人々の生活をとらえる視座を「生業」から「経済」へと拡大し、生産ないし労働のみならず、日常的な消費へ注目することであった。さらに、経済活動を暦通り予定されたもの実践として捉えるのではなく、その「場」ごとに現出する実践と捉えてマイクロ・マクロ双方の文脈を問うコンテキスト分析を採用した。その成果は1963年の福井県の一山村とい

う時代性・地域性に限られた知見となるものの、以下の3点に要約される。(1) マクロな経済の拡大は日常生活における現金の比重を増やし、学校行事や宗教行事の分担を含めた家族内分業を現金収入獲得へ特化した形態に編成した。(2) 消費とマクロな社会経済的背景の連関は、町場での買い物リズムと失業保険制度との結びつき、サービス・娯楽の場における選択的な消費の態度、年末の過ごし方にみられた。(3) 伝統的な儀礼食の消費、高度経済成長期に特徴的な食品・嗜好品の消費、町場における買い物のいずれにおいても消費の実践は社会関係に埋め込まれ、その社会関係は家族を中心とする点に時代的特徴がみられた。

以上の成果は、従来の生業研究や経済研究において注目が不十分であった日常的な消費について、その具体的なあり方を日記と家計簿によって詳細に記述し、マクロな社会経済的背景との連関や、ミクロな社会関係の中で消費を捉えた点に意義があると考えられる。1年間のみの静態的な分析に留まったため高度経済成長期における生産・消費の通時的変化の解明に課題を残すものの、経済研究が「日常実践を根底から規定する思考の様式を問うための概念」[門田 2010: 207]として消費を捉え直す必要があるならば、本論文はそのための基礎作業と位置付けられるだろう。

付記

本論文は、2013年度現代民俗学会年次大会の個人研究発表を基にしたものである。発表に際し、多くの方から貴重なご意見を頂いた。この場を借りて感謝申し上げたい。また、本論文は科学研究費補助金(基盤研究(B))「焼畑の技術と知恵を活かした日本の森づくりに資する実践的地域研究」(研究代表者鈴木玲治、課題番号23310179)の成果の一部である。

註

- (1) 民俗学における「経済」という術語の使用は近年に限ったことではなく、例えば和歌森太郎は経済伝承を「伝承的生産・供給・消費を中心とする社会生活」[和歌森編 1976: 2]とし、「生産から消費までの全経済活動を「社会の営み」としてとらえる」[同: 312] 必要を提起している。しかし「経済伝承」という術語は定着せず、和歌森のいう「経済伝承」のうち「伝承的生産」に関する研究が、生業研究の下で進められてきた。こうした事情から「民俗学の経済研究では第一次産業従事者の生業への強い力配分」[門田 2010: 208] が働いており、塚原伸治が指摘するように民俗学における流通や消費への気づきはごく近年の動向と言わざるを得ない [塚原 2010: 22]。
- (2) 民俗学において日記や家計簿を利用する研究は、早川孝太郎を嚆矢として数多くの蓄積があり [早川 1973 (1950)]、高度経済成長期の生活を対象とした近年の研究においても、永江 [2011] や安室 [2012] のように1世帯の日記や家計簿を資料とする手法が好まれる。
- (3) 味見河内地区の焼畑については杉本 [1953]、野本 [1984: 596]、玉井 [2010] に詳しい。なお、2012年現在の味見河内地区においても、焼畑は5世帯ほどが実施している。
- (4) 旧上味見村役場文書「地租名寄帳」福井市美山総合支所蔵。当時の味見河内地区では「(水田)3反持つる家は大きな顔してた」と言われ、A家の所有耕地面積はごく平均的であった。
- (5) 1950年代、家の光協会は農協と協力して家計簿記帳運動を推進した [西川 2009: 251]。
- (6) 1947年の施行当時は「6ヶ月出稼ぎ→6ヶ月受給」であったが、1955年には「6ヶ月出稼ぎ→3ヶ月受給」に制度が変更され、本論文の事例もこの時期に該当する。さらに1960年代後半には出稼ぎから帰還して就労せずとも保険金を受給する農業者へのバッシングが世間で強まり、1975年に失業保険制度は廃止された [加瀬 2011]。
- (7) 総務省統計局のwebサイト <http://www.stat.go.jp/data/chouki/20.htm> より「20-4-a 農家の年間家計

収支—全国（大正10年度～昭和51年度）」（2013年6月28日最終閲覧）。

文献

- 今里悟之 2010「実践の民俗学の傍らで」『日本民俗学』261
- 岩本通弥 1998「「民俗」を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は「近代」を扱えなくなってしまうのか」『日本民俗学』215
- 加瀬和俊 2011「出稼ぎ農民像の変貌—季節労働者失業保険金問題を手がかりに」『国立歴史民俗博物館研究報告』171
- 門田岳久 2010「消費／消費社会から捉えなおす日常への視角—人・物・商品の社会的プロセス」『日本民俗学』262
- 門田岳久 2011「生の全体的記述は可能か—空間・文脈・民族誌」『現代民俗学研究』3
- 門田岳久 2013『巡礼ツーリズムの民族誌—消費される宗教経験』森話社
- 倉敷伸子 2013「消費社会のなかの家族再編」安田常雄編『社会を消費する人びと（シリーズ戦後日本社会の歴史2）』岩波書店
- 小島孝夫 2001「複合生業論を越えて」『日本民俗学』227
- 杉本 寿 1953「河内燕—大野郡上味見村こうち聚落」『若越民俗』14
- 塚原伸治 2010「経営戦略としての「伝統」—地方都市小売業における伝統的商慣行の選択」『現代民俗学研究』2
- 玉井道敏 2010「焼畑と赤カブ—福井県美山町河内の焼畑による赤カブ栽培体験録」『農耕の技術と文化』27
- 永江雅和 2011「高度経済成長期農家の家計分析—茨城県県南部3町歩農家村松家の事例」『国立歴史民俗博物館研究報告』171
- 中野 泰 2010「民俗学における「漁業民俗」の研究動向とその課題」『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』1
- 西川祐子 2009『日記をつづるとのこと—国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館
- 野本寛一 1984『焼畑民俗文化論』雄山閣
- 早川孝太郎 1973（1950）「佐々木家の「積歳簿」」『早川孝太郎全集7』未来社
- 原山浩介 2013「戦時から戦後へ」安田常雄編『社会を消費する人びと—大衆消費社会の編成と変容（シリーズ戦後日本社会の歴史2）』岩波書店
- 松田睦彦 2010『人の移動の民俗学—タビ〈旅〉から見る生業と故郷』慶友社
- 安室 知 2012『日本民俗生業論』慶友社
- 矢野敬一 2007『「家庭の味」の戦後民俗誌—主婦と団欒の時代』青弓社
- 湯川洋司 2011「高度経済成長と山村生活の変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』171
- 和歌森太郎編 1976『経済伝承（日本民俗学講座1）』朝倉書店
- 渡部圭一 2007「農家の商才—狭山茶の高度経済成長、その持続と生成」『史境』54
- 渡部圭一 2013「民俗学の一九八〇年代と「都市」概念」『口承文芸研究』36